

## 高木惣吉と六韜<sup>(1)</sup>

下平 拓哉\* \*\*

### はじめに

終戦軍師や軍人学者で知られる高木惣吉は、昭和の日本及び海軍を研究する上で極めて貴重な日記、覚書等、膨大な史料を残している。国立国会図書館憲政資料室には、2442枚の『高木カード』が納められており、天皇陛下を初め近衛文麿、木戸幸一、高松宮宣仁ら宮中グループ、岡田啓介、米内光政、井上成美ら海軍内の枢要な人々の発言や行動が詳細に綴られている。原典としてのこれらの史料は、高木惣吉の一連の著作等に一部引用されているが、これまでに活字化されていない部分も多い。

本研究を進めるに当たり、海上自衛隊幹部学校資料室等において、盲打ちに雑然たる書庫を探している内に、「高木惣吉文庫」において、未発表の『六韜新論』『六韜漫談』等を新たに見出すことができた<sup>(2)</sup>。そして、そこでは、高木惣吉が、日本という国家と国民を強く意識していることを確認することができた。

「大化の改新」で知られる中臣鎌足は、早くから中国の史書に関する造詣が深く、『六韜』を暗記していたと言われる。皇極天皇4年(645年)6月12日、飛鳥板蓋宮において、中大兄皇子や中臣鎌足らが蘇我入鹿を暗殺した。そして、翌日には蘇我蝦夷が自らの邸宅に火を放ち自殺したことにより、蘇我体制に終止符が打たれることと

なった。この「大化の改新」は、蘇我氏など飛鳥の豪族を中心とした政治から、天皇中心の政治への転換点となったという大きな歴史的意義を有するものである。その後、天智天皇となる中大兄皇子の最大の腹心であった中臣鎌足は、まさに忠臣の鑑であるとされ、『六韜』を学ぶことが、忠の心を形成する礎となったのは疑うべくもない。

三国時代の戦乱の下で書かれた権謀術策の『六韜』は、政治・外交と軍事の関係のあり方、つまり理想をその史的教訓から導出したものと言える。昭和24年(1949年)1月5日、高木惣吉は、辰巳亥子夫というペンネームによって『六韜新論』と『六韜漫談』を書き上げている。そのなかにおいて、「六韜」について、「六韜は太公望自身のものでないとしても、一七〇〇年乃至一九〇〇年前のものでありますから、この一見民主思想の精髓のように読みとらるる名言の背後に君権思想が根を張っていることは自明のことであります。然し支那は夏、殷、周、春秋戦國、秦を経て前漢後漢、三國の頃に著はされた六韜に、治乱興亡のあとを訊ね堯舜以来禪譲にあらずして放伐、篡奪であった易姓革命の真相を捉えて、民衆福利の増進がいかに大事であるかを強調した。この教訓が史實に立って生れたであろうことは、単なる想像ではなかろうと思うのであります」<sup>(3)</sup>と説明している。そして、高木惣吉は、『六韜新論』において、国民に焦点を当てつつ、主として、古今東西の兵学書の教え、過去の戦訓、自己の経験を織り交ぜて分析することにより、太平洋戦争の教訓と現代的意義を導出している。ここでは、『六韜新論』を中心に採り上げ、これを『六韜漫談』に

2022年11月30日受付

\* 江戸川大学 基礎・教養教育センター 非常勤講師

\*\* 事業構想大学院大学教授 政治学

よって補足しつつ、高木惣吉が想い描いた理念と現実について、特に、指導者、国民、人間を中心に分析することとする。

## 1 禍福君に在り

『六韜新論』の第一章は、「禍福君に在り、天時に在らず」と題し、理念としての指導者と国民のあり方、及び人間本位について論じているが、まずその分析評価を加える前に、日本の特質として強調すべきことを、次のように冒頭に記している。

『般若心経に、『照見五蘊皆空、度一切苦厄』という深い訓があります。維摩経不二法門品には、『有為と無為とを二となす。若し一切の数を離るれば、則ち心虚空の如く、清浄の慧を以て、所礙無き者、是れを不二法門に入ると為す。』という深い訓もあります。

歎異抄第十条には、『念佛には無義をもて義とす。不可称、不可説、不可思議のゆへにとおほせさふらひき。』という浄土真宗の最も肝心な訓が記されてあります。無義をもて義とす、とは、『ハカライのないのが最もよいハカライになる』という意味であります。

これらの仏教の深遠なる教義が近代のわが国では、非常に浅薄に、誤り信ぜられるようになりましたが、茲には仏典の説明が主意でなく、わが兵術界や政界にあって、徒らに手を携ねて、無為無策、ものごとの成り行きに打ち任せることが、佛教の極意とする『無為有義』にすり替えてしまったことこそは、実にわが亡國滅民の大原因の一つになったということを強調したいのであります。

儒教の流れを汲んだ向きでも、稍ともすれば、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、ということを極端に推しすすめ、それかといってその対句となっている。

道之以徳、齊之以礼、有恥且格というほうは、一向に努力しないで果報を俟つ傾向は実に大正、昭和の滾々たる風潮ではなかったでせうか。<sup>(4)</sup>

このように、日本の特質の第一として、無為の誤解があったことを指摘している。そして、仏教の深遠な教義である無義をもって義をなすことを無為と誤解し、ものごとの成り行きにまかせる無為無策が、日本滅亡の危機に瀕することとなった一大原因であるとしている。

引き続き、

「老子第二章の『是を以て聖人は無の為すの事に処して不言の教を行ふ』、第三章の『無の為を為すときは則ち治らざる事無し……』、第三十七章の『道の常は為すところ無くして、無さざる無し……』。

これらの解釈は決して現代的皮相の理解を以て片づけられぬ意味を持つものと思われませんが、わが国では明治後期から矢張りこれらを一概に人為人工の一切を排撃するものと解釈して、拱手静観して所謂天意に一任して諦観するのが道の極地とする風習が滲こんで参りました。『無』とか『無為』とか記されていることは、果たしてそんな消極的、受動的、静止的の意味で、積極的、能動的、創造的意味を拒斥した意味のものでせうか。私はそれには深い疑をいだくものであります。例へば、六韜盈虚第二の心を削り志を約して事に無為を従う（小刀細工、無理なことをやらぬ）。<sup>(5)</sup>

このように、日本の特質の第二として、静観・諦観の誤解を指摘している。つまり、天意を尊重し、重きをおくあまり、静観し、諦観することが道であるとの誤った解釈が根付いたことに疑問を呈している。

このような日本の特質に対して、『六韜新論』は、次のように指摘している。

「孫子、管子、六韜その他随分人間本位の積極的行動主義の教義があったことは興味ぶかいところであります。

『文王、太公に問うて曰く、天下熙々（広大）たり、一盈一虚、一治一乱、然る所のものは何ぞや。其れ君の賢不肖の等しからざるか、其れ天の時の変化の自然か。太公曰く、君不肖なれば、則ち國危くして民乱れ、君賢聖なれば、則ち國安くして民治まる。禍福は君に在り、天の

時に在らず云々』。

これは管子に『一國之存亡在其主，天下得失道一人出』という思想と符号いたしまして、當時のような専制君主，中央集権時代に在って，統治者なり，或は統帥の責任者がその邦家の興亡に限りない影響力を持っていることを明らかにした教訓であります。今日から約一五世紀乃至一八世紀前の支那帝王の地位が政治的にも社会的にも，また倫理的にも，一般民衆の禍福を左右したものであったという，この主張は充分肯けると思われます。<sup>(6)</sup>

このように，孫子，六韜の教えによれば，積極的に行動することを強く唱えており，日本の特質である無為の誤解，静観・諦観の誤解を克服するためには，積極的行動主義が必要なのである。

以上を踏まえた上で，太平洋戦争における指導者の責任の重さについて，次のような分析を加えている。

「現代社会に於ては，権力者の地位が当時とはかなり変遷したものであることはいう迄もありません。即ち，その権力集中の程度は往時と比較にならぬ程弱いものになっていますし，且その権力の基礎が法規とか，約款とかによって規定されていて，無制限な独裁専行を許さないのでありますが，それでも尚，人間社会の歴史的創造は全く無限の大海に航海するようなものでありますし，所謂パトスの世界をロゴスの世界に組織し，整調するには，その指導者の責任というものは決して根本的に変わったとはいえません。若し，科学の進歩なり，人類思想の複雑化による外部社会との交渉の激化，内部統制の困難となったことなどを勘定にいれますと，制約が多いだけ，指導者はその責任を果たすことが難しくなったといえましよう。『禍福君に在り』の教訓は決して陳腐となった教訓ではありませんまい。

上古社会に於ける帝王の個人責任の思想は，現代社会に於ける人間本位社会の連帯責任の思想に発展させて考えられると思ふものであります。それは歴史を無視した飛躍であるとの批難も起り得るでありましようが，禍福君に在りと

いうのと，禍福君に在りというのとは，階級対立だけを対象とする理論では主客顛倒の為か出て来ますが，人間対自然の関係を対象とした理論では共通の基礎をもっているといえます。太平洋戦争の生々しい教訓を分析するとき，『禍福君に在り』の感慨を特に，身にしみじみと痛感するのであります。<sup>(7)</sup>

このように，指導者の責任とは根本的に変わることなく重要であるが，社会の複雑化に伴って制約要因が増加しているため，指導者が責任を果たすことがますます難しくなっているとしている。したがって，まさに『六韜』の言う「禍福君に在り」なのである。そして，太平洋戦争にあっての最大の責任者を近衛文磨とし，次のような評価を下している。

「開戦の前奏曲ともいふべき支那事変の発端から，日米交渉に就て最も大きな責任を執らなければならぬのは，近衛文磨公であります。公は確かに聡明な，そして政治的感覚の鋭敏な人でした。その人物鑑識力も多くの弱点はありましたが，当代としてはやはり勝れたものであります。然し，その決断力の不足，能動的創造感の欠如，肉体的憶病は致命的な欠点をなしたように観測されました。従って，東条を盟主とした形の陸軍の反対を押へて日米交渉を成就させることは，到底望をかけられなかったことでしょう。

近衛公に代った東条は，性急な規帳面屋で，事務的には勉強家であったのです。あちら，こちらの欠点や手落ちを探して，賞罰を得意とした。火見櫓に登ったり，漬物屋の店頭に現はれたり，配電会社に『朝がけ』を試みてその無駄な電灯のつけ放しになっているのを取って押へたりして，当人は大いに治績を挙げる決心であったでしょう。

然しその頭にはこれといふ学問もなく，その胸に燃ゆる理想とともなく，憲兵政治の威力を盲信した権勢マニヤ。従って戦争か平和か，陸軍か国民か，というようなアカデミックな問題は，可笑しくてという傾向の俗物にも過ぎなかったのです。

島田海相、武藤軍務局長何れも海、陸軍という硬化した組織から萌えてた毒菌のような指導者であって、人間としての取柄をもった人達ではありませんでした。内大臣の木戸幸一候は、これまた一ヶの勤勉なる事務家であって、理想も信念もなく、政治の体勢に乗って事を運ぶ人でありました。もし、候が一介の庶民階級に生まれたとしたら、勢々、局長どまり位ではなかったでしょうか。極端にまで老子の『企者は立たず、敢えて天下の先とならず』を実践した人です。創造的な仕事とか、大局からの判断や度量を殆ど眼中におかなかった候は、自己の輔弼の合理、合法なることの理由とか、陸軍に対して毫末も片手おちを冒さないということが、その最も心を配った重点であったのであります」。(8)

このように、支那事変から日米交渉において最も責任があるのは近衛文磨であり、政治的感覚に優れてはいたものの、決断力がなく、創造性に乏しく、肉体的に臆病であったことは致命的であったとしている。また、東條英機については、事務的に勉強家ではあったが、学問もなく、理想も全くない権勢マニヤと称している。さらに、木戸幸一については、勤勉なる事務家であって、理想も信念もない、政治の体勢に乗る人であり、大局からの判断度量がなかったとしている。

一方で、天皇陛下については、次のように分析している。

「最高の地位に立たれた天皇裕仁の平和的善意、自由主義的立憲思想、反軍国主義の意図は誰もこれを疑はない。ところで、その着意も批判も決して誤っていたとは申されません。唯然し、その善意の実現、その着想の追及は(洵)に淡々というか、應揚というか、何等の執着も自己主張も看られず、輔弼者なり、側近者が強引に一押し、二押しすれば、他愛なく『ア、さう、ア、さう』で裁可されたのであって、曾つて田中義一首相の満州問題に関する奏上、二・二六事件、二十年の終戦の際の三回だけは自己の信念を主張されたが、それ以外は全くロボット化された様であった。然るに日本の旧憲法は

重大な事項、例えば統帥と一般国務との総合は、天皇御自身でなければ、成文上はこれが輔弼者がなかった。大臣も、総長もその点は並行的で、互いに他の所掌に立入って共同輔弼する権限が成文上存在しなかったのであります。

茲に國政運用の基本法の遺漏、天皇の執られた立憲主義との『ギャップ』に統制の乱れた陸軍々閥が乗ずるところとなってしまったのであります。然し、根本的には、世襲制の指導者というものは、いかに資質の優れた人であっても、人間的訓練の機会というものが必然的に限定されますから、かかる制度自体に悲劇の必至を内包するものと看られないこともありません」。(9)

このように、天皇陛下は、平和的善意、自由主義的立憲思想、反軍国主義であった。また、淡々、鷹揚で、執着しないところがあった。そして、統帥と国務の総合は、天皇陛下のみに委ねられることとなっていたため、そこに統制の乱れた陸軍閥が乗ずることとなったのである。さらに、世襲制である天皇制においては、人間的訓練機会が限定されるという問題が必然的に内在していることに注意を促している。

そして、天皇陛下を取り巻く陣容については、次のとおり分析している。

「維新革命後七十余年を経て、わが國は尚封建的門閥制度、中世式貴族階級政治の殻を脱していなかったことは、適材適所に至らなかった大原因で、統帥部でも太平洋戦争の少し前迄、陸軍は閑院宮、海軍は伏見宮を総長に奉じて、政治を左右する権力の中樞を情実と阿談迎合の本尊にしてゐたのであります。

維新の頃は、明治帝の側近には西郷、山岡、元田あり、公卿出身には、三条、岩倉あり、薩長には、大久保、西郷、大山、木戸、山縣、伊藤、土肥には、坂本、板垣、後藤、大隈と兎も角、世界的水準に近い人物が居ました。学界教育界にも、福沢、中村、新島、内村、加藤らは、これまた、世界に出してそう恥しい人々ではありませんでした。

然るに、昭和のわが人材陣はどうであったで



しょうか。政界の近衛、木戸、平沼、広田、若槻、阿部、東条……。軍部における寺内、杉山、畑、梅津、阿南、永野、及川、吉田、島田、豊田、古賀……。実にその規模の狭少と困難に体当たりする情熱も信念も、どこに求めることができたでしょうか。

海の東郷と山本とでは、人物、技量に格段の差があります。陸の山県、大山、野津、児玉、黒木、乃木らに匹敵する頼もしさと香りの良い風格は、僅かに今村均將軍位ではなかったでしょうか。寥寥まことに寂しいものであります。その僅かな人材、海の米内、山本の如き、陸の柳川、今村に如きは、大切な時期には肝心の地位に握っていなかったのであります」。(10)

このように、天皇陛下の周辺に人材を配置できなかったことを指摘している。つまり、昭和になってもなお、明治期の封建制度や貴族階級政治から脱却することができずに、適材適所を実施することができなかったのである。そして、昭和天皇を取り巻く人材の実態については、政界、軍部ともに、情熱と信念に欠けていたのであった。

そして、近代戦における特徴を踏まえつつ、次のように人間の重要性について強調している。

「戦争は政治の実践とは違った意味に於てではあるが、徹底的に或る一つの立場をとることになる。しかもこの立場は、一定の組織（國軍、政党、政治機構等々）に傳ふもので、個々人の随意に、自由奔放には振舞えない。戦争の場合は、主将の思ふがままに作戦が出来ることが理想ではあるが、往昔の名将はそんなこともできたが、近代戦となって、大兵数となり、海、陸、空の共同となり、他國軍との聯合となり、或は國內の政治勢との睨み合せを要する時代となってきたので、主将の自由意志は極度に制約されることになってきた。第一次大戦以来、將軍や提督の個人的の力量で戦局が改善されたと断定できる場面が非常に少なくなったのは、このためである。これに反比例して、個人の欠点とか油断による破綻を招く例証は随分多い。太平洋戦争でわが陸海軍の實例は一々あげることができない程沢山ある。これは組織の積

極的、建設的、仕事は組織が龐大となるに従い、文化が進むに伴って各個人個人の理解と自発的の協力が根本となって、指導者の独裁専制では出来なくなるのであるが、敗戦とか破綻とかいうことは、他動的なものであるから、指導者の不注意なり、失錯が全集団を雷火にうたれた羊の群のような怨惨な状態に陥れる。

技術としての戦争、技術としての政治が、社会の個人的自覚が進むにつれて難しくなり、その占める比重が大きくなることは争へないが、然し戦争なら政治の根底は結局人間である。だから、名将や優れた政治家は何よりも人間通でなければならぬ。唯人間通といっても人間の弱点に乗ずることを以て人間通と心<sup>マ</sup>じてはならぬ。戦争は敵に対しては人間の弱点を突くということも必要である。然し、味方に対してもこれを利用するという習癖に落ちると、大正、昭和を通じてわが陸軍が辿ったような墮落をくり返すことになる。それに自壊作用のほうが早く進んで、敵に応用する前に、味方が腐敗してすふ。

政治もさうであって、理想を求める心、人實社会の連帯性や社会悪掃蕩の良心的要求を一部の権力マニアの不純な動機に利用する實例が多いので、政界の常套手段になっておるが、そんな人間通の悪用では人民政権の動きも社会革新の運動も忽ちにして腐りが這入ることは、決して予断に難くないことと信ずる」。(11)

このように、近代戦は、陸海空の共同や他国との連合、国内政治状況等、様々に絡み合うようになってきた。したがって、個人の力量で戦局が改善されることが非常に少なくなり、逆に個人の欠点や油断が破綻を招くことが多くなってきたのである。そして、敗戦というものは他動的なものであることから、指導者の不注意や失錯が大きな意味を占めることとなる。つまり、戦争も政治も、結局は人であることから、人間通でなければならぬのである。

このように、理念としての指導者と国民のあり方、人間本位は、現実として、日本の特質である無為の誤解と静観・諦観の誤解を克服することができなかったために、理念と現実のギャップは埋

めることは叶わなかったと言える。

## 2 愛民而已

『六韜新論』の第二章は、「愛民而已」と題し、国民中心を理念として掲げ、太平洋戦争下の国民との接点について論じている。

「軍事産業に徴用した勤労者数は終戦時實に、六、一六四、一五六名で、その内新規に徴用したものは、一、六〇九、五五八名に達し、学徒動員は、一、九二七、三七九名、女子挺身隊は、四七二、五七三名となりました。

これらの徴用された人々は、自己の職業を奪われ月給平均一円二十銭を以って駆り出されて行きました。その徴用の手順には、合理性もなく、また、涙もありませんでした。かく國民を奴隷のように取扱った指導者たちが、昭和二十年春、最高戦争指導会議で決定で最後の戦争指導大綱の方針には『帝國は昭和二十年前半期に於て速に日滿支の総力を徹底的に結集、戦力化し、特に本土決戦即応態勢を確立し、一億必勝を確信し主敵米の侵寇を破摧し、飽く迄戦争を完遂す、この間活澄なる施策より対ソ静謐の保持に努む』とあります。實に驚きいった妄想と謂うか、独断と謂うか、形容もできぬ観念的戦争指導であります」。(12)

このように、悲惨かつ物狂ほしいものであった太平洋戦争末期における日本の戦争指導は、妄想、独断とも言うべきものであり、そこには合理性もなく、國民を奴隷のように扱ったとし、これを観念的戦争指導と形容している。

この國民に対する接点の代表として、官僚について次のような分析を加えている。

「支那事變の始まって以来（一九三七）わが國內政治の實質的切り盛りに幅をきかした所謂新官僚に共通した観念の一つとして、實に伝え難く感ぜられたものは、彼等と國民との関係が、『自由なる主体とモノ (Sache)』との関係として取り扱はれたことである。その点却って軍閥者流のほうは、強い自我意識に基かず、最高の國家權力への依存性から脱線して行ったの

で、このほうはまだまだ無思想で一種の相対的優越の意識からの狼藉に近かったのであります。

従って戦時事變中の総動員法案や統制経済法案の根底には、独逸流の國民を物件視する冷酷なるものが流れていたもので、東洋特に、わが國にこの政策が成功しなかったことは、当然のことといわなければなりません。

『民其の務を失ふは……』

茲に省略し得ないことは、わが國官僚政治の余弊がどんなに甚だしいものであったかということである。

明治初年に官僚制度が誕生してこのかた、最近に至るわが國官僚資質の中には、江戸幕府封建制の類似性と傳來とが強く残されてきたことは広く認められているところである。然し、変わらなかったのは建前ばかりではない。かかる優越的、指導的建前から生まれた官僚の尊大、不遜、不親切に加えて極度の繁文縟礼は當に國民の憤懣の対象となった許りでなく、敗戦の大なる一原因となったことは争えないのであります」。(13)

このように、支那事變以来の情況として、新官僚の抬頭をあげ、その國民を物件視するドイツ的性向が、日本の政治に問題を来すこととなったとしている。また、その僭越的立場から、官僚は尊大で不遜なものであったとし、規則が細かすぎ、煩雑な手続きが多く、非常に非能率的な国内狀況が敗戦の一大原因であったとしている。

そして、この官僚制と民主主義との関係について、次のような分析をしている。

「ジュール・ロマンの官僚論には、フランス官僚の弊害を痛罵してありまして、官僚は社会といふ肉体のなかのあらゆる動脈や毛細血管のなかに『ビューローコース』(官僚球菌)とも名づけるべき毒素をばらまくのである。この球菌はそれの接触するいかなる要素にも、たとへそれが病源から遠く離れた部分であっても、独善的でおせつかいな頭の悪さを伴ふ病素を感深させるといふ効果を持つ。

この球菌の存在を示す独特の徴候は、書類に

対する飽くことのない渴望といふことである。……彼等が一定の戦争に限定された奉仕をするといふ唯一の目的のために作られたものであるといふ事実を見失ってゆくのである。彼等は官庁それ自体が一つの窮極の目的であり、公衆といふものは官庁にその精力や創意を実践する機会を與へるためにのみ存在するものであるといふ確信を益々発展させてゆく。彼等は剪術家がその材料を眺めるやうな眼で公衆を眺めてゐる。……

彼等は、自らの勢力が増大することを、正しい社会の健康の現れと考へてゐるのである。新しい官庁が作られることは、直ちに進歩の勝利を示すものであり、たとへその官庁が與へられた特殊の任務を完了した後も、官僚はその存続のために努力するのである。

すべての官吏の懐いてゐる夢は、自己の具現してゐる権力の分量を増大することにある。属僚を獲得して昇進することにある。……

官僚は、卑賤な人間がそのいかめしいリズムと、融通の利かない時間割を乱さうとするのを見ると、侮辱を感じる。官僚にとっては、彼等の時間だけが本当の時間なのである。さうしてその時間は、それ自身の不変の法則を持つてゐるのである。これを要するに、官僚の根本的な特質は、現實に自らを適應させることの無能力にある。……

あらゆる制度のなかで、デモクラシーは最も官僚を警戒しなければならない。何故ならデモクラシーは、他のいかなる制度にも勝って法律制度を尊重し、権威の濫用を憚るからである。その結果、デモクラシーは、官僚を手荒く彼等の位置に押しとどめて置くことを、敢てせず、むしろ彼等に迎合するに至るのである。そのために官僚は、デモクラシーの心臓部に独裁者の網を張ることができる」。(14)

このように、官僚制は、毒素をばらまくものとして、その弊害を、書類に対する渴望、自己勢力の増大、融通性のない時間感覚等を掲げ、民主主義政治においては、特に官僚制を警戒すべきとしている。

そして、国民に対する傾向として、「愛民愛人のことについて二つの大きな傾向のあることを、戦争の教訓に顧みて述べてみたいと思います。その一つは、感傷的、浪漫的人間愛の考であり、他の一つは、理性的、現實の人間愛の往きかたであります」(15)と、官僚制は、軍部組織に蔓延し、その官僚は尊大であり、社会的病根であると形容している。また、藩閥、党閥、官僚閥があり、その官僚にも学閥、派閥、社閥があり、民間にも財閥があったのである。

また、国民への接し方に関して、日本に特徴的な傾向について、次の事例を挙げつつ、分析している。

「日露戦争の蔚山沖海戦で、わが上村第二艦隊はエッセン少将の率いた浦塩艦隊を破って追撃に移ったのでありますが、中途追撃をやめて引返し、沈没艦リューリックの人員救助にかかっている暇に、敵艦隊は悠々停止して換所の応急修理をして無事浦塩ににげ帰ったのでありますが、これはわれわれ日本人に、非常に特徴的に現はれる感傷主義であります。浪漫的戦略は、条件が多岐で複雑を極めますから、実践上には困難が多いものであります。又激情のほとばしるところ、極端に残虐な非人道的行為に走る危険も多分にあります。(中略)

理性的、現實的戦略は、その点、合理的というか、打算的というか、冷徹した立場をとりまします。これも日露海戦のときの例であります。五月二十八日朝、蔚陵島南方で、ネボカトフ少将の敗残艦隊はわが連合艦隊の包囲に陥ってしまったのでありますが、東郷大将は應戦を取えない口艦隊に対して容赦なく全艦隊の砲撃を開始させました。秋山参謀のごときは、甲板を踏み鳴らして、『長官、武士の情けです、砲撃を中止させて下さい』と進言した。すると、澄みきった長官は『敵艦隊は進航を続けてるではないか。降伏の意志表示をしていないではないか。』と答えて感傷的になっていた参謀たちを沈黙させたのであります」。(16)

このように、日本人に特徴的なものとして、感傷主義、浪漫的戦略、それに起因する激情による

非人道的行為を掲げている。また、その一方で、理性的、現実的戦略、合理的、打算的、冷徹な側面を例示している。そして、この海軍における浪漫的、かつ感傷的な性向は、貴重な国民の力と資材を浪費することとなったのである。

また、高木惣吉は、太平洋戦争下の浪漫主義について、自己の経験から次のように述べている。

「愛兵……愛民の實例

私の親しかった一人の友人は、南太平洋海戦のとき、旗艦となった航空母艦の艦長で出ましたが、その友人は出陣の直前に部下一同を集めて、『自分はどんな場合になっても決して総員退艦の命令は出さない。本艦とともに最後迄奮闘する決心である、諸士も凡ゆる手段を尽しあくまで本艦を守って、戦闘が続けられるよう全力を尽すことを望む』と宣言した。これは、艦という道具のために乗員を犠牲にしても顧みないという超現実主義のように一寸観測されますが、その友人（A）自らが私に語ったところから、それは天皇の聖旨を奉に陛下の軍艦を以て闘ふことをわれわれの本分とする以上、軍艦は天皇の表現としてこれを守り通すのである。乗員とその軍艦とは、不可分のものであるという観念からでありまして、國体観に基くロマンチズムの変形と思うのであります。

彼は南太平洋海戦で、乗艦に敵の爆弾を被ったに拘らず見事にその艦を基地に凱旋させたのであります。この同じAは、米軍の比島に襲来した時は、航空戦隊司令官となっていました。昭和十九年十月十五日、自ら攻撃機に搭乗して敵艦に体当たりして悲壮なる戦死を遂げました。彼は平生主張していたその言葉の仮指揮官先頭の特攻々撃の模範を示したのであります。特攻々撃は人間を爆彈代りに使ったので、ウルトラ・リアリズム 極端な シュール・リアリズム 超 現 實 主 義 と見えますが、現地で採用した原型は矢張り日本特有のロマンチズムに発したのであります」。<sup>(17)</sup>

このように、一見、超現実主義的に見えることも、その内実は、國体観があり、日本特有の浪漫主義がその基調にあったとしている。

さらに、

「然るに戦局が悪化して、飛行機も足らず乗員の練度も低下し、一方敵艦隊は余りにも懸絶した大勢力でどうにも作戦計画が成り立たなくなり、特攻々撃を大本營の計画に織りこんで、無理にも勝算の帳尻を合はせようとしたのが、二十年度に入ってからの実情でした。中央の計画的指導となってくると、今度は一変して超現実主義の戦法となっていました。

これは或る意味からは己むを得なかった事情もありましょう。戦争指導以下の段階で作戦計画をたてるとすれば、終戦とか、降伏とかいうことはその思惟の枠外でありますから、無理にも勝つような作戦計画を樹てなければなりません。

然しかように超現実主義の作戦を実施するには、矢張り条件が揃はなければなりません。即ち従事する人々がその冷酷なる事實に堪え得るだけの帆綱のような強靱な民族的神経を持合せなければなりません。又、かかる重圧を人間精神に與えて、而もその秩序を保ち得るだけの組織的統制力が用意されていなければなりません。また最も重要なことは、その戦法によって必ず効果が収められ、勝利が保証されなければなりません。昭和二十年の戦局ではその何れも備っていませんでした。特攻隊基地が一時は戦闘の興奮で多少士気の振うのを見ましたが、鬥っても斗っても敵機動部隊が減らないのを見て、陸海軍とも甚だ不穩の様相を呈するようになったことは、亦必然の成行きではなかったでしょうか」<sup>(18)</sup>と、昭和20年に入って、それまでの日本特有の浪漫主義は、特攻攻撃といった超現実主義な戦法へと変容を遂げることとなったのである。

そして、超現実主義の作戦を実施するには条件が必要であり、強靱な民族的神経、重圧に秩序を保てる組織的統制力、そして、勝利という効果の保証がなければならぬが、その何れも備わっていなかったのである。

ここで、『六韜漫談』から引用すると、次のとおりである。

「國務第三 文王太公に問うて曰はく、『願は



くは國を為むるの大務を聞かん。主をして尊く人をして安からしめんと欲す。之を為すこと奈何』太公曰はく『民を愛するのみ』

文王曰はく『民を愛するとは奈何』太公曰はく、『利して害する勿かれ。成して敗る勿かれ。生かして殺す勿かれ。予へて奪ふ勿かれ。楽しまして苦しむる勿かれ。喜ばせて怒らす勿かれ。』(中略)

支那事変以来、日本に幅をきかした所謂新官僚の考の基調である。新官僚にも種々あって一概に批評出来ないしその識見人物にも一から九までであるが、然し共通して國民を手段と見る觀念である。當時の觀念では所謂計画經濟の手段として國民を見たのである。『カント』の人格は他の手段として存在するものに非ずといふ金言を無視したところである。

鈴木庫三とか杉本某とかいふ陸軍報道部の連中が、一部の思想的『ファッショ』に擔がれて、國內で多少とも異った思想の持主は片端から討滅すると放言して國內民心をメチャメチャにしたのは、矢張り偏狭な軍國主義とか國防國家とかいふものを絶対視してその内容をなす國民を手段視した誤りであると思ふ。<sup>(19)</sup>

このように、支那事変以降、官僚が支配し、國民を手段視していたのであった。つまり、理念としての國民中心は、現実として毛頭有していなかったものであり、したがって愛民など育まれることはなく、ここにも理念と現実の埋められないギャップが存在していたのである。

### 3 天下之耳目と天下之福利

『六韜新論』の第三章は、「天下之耳目と天下之福利」と題し、人智を理念として掲げ、國民への対応について論じている。

「大札第四に、文王曰く、主の明は如何、太公曰く、目は明を貴、耳は聰を貴ぶ、天下の目を以て視るときは則ち見えざるなし、天下の耳を以て聴く時は則ち聞かざるなし、天下の心を以て慮る時則ち知らざるなし、輻輳(輻が轂に輳まること)並び進む時則ち明蔽なれず矣。

というのがあります。これは近代政治に當てはめても少しも狂はない千古の教訓とも言えましょう。智は人の智を用ふるより大なるはなし、天下の心耳目を駆使するということは、蓋し極意中の極意ともいふべきでありましょう。(中略)

わが國で指導的地位に就いた最近の人物の中では、各方面の意見を聴くことにかけては近衛公が一番すぐれていたように思います。<sup>(20)</sup>

このように、近代政治において、人の智を用いること、すなわち天下の心耳目を駆使することは極めて重要なことである。この点に関しては、近衛文麿が最も優れていたと思われる。

引き続き、

「昭和二十年八月十四日夜、近衛師団が宮城を囲んで終戦の勅語の録音盤を強奪しようとした際、近衛はいち早く、陸軍の不穩の情報を得て、これを木戸に内報したが、内府はまさかと気にも留めず寝着いていたところ、反乱軍に闖入されて金庫室にかくれて辛うじて難を免れることができた。當時内大臣といえは實質上国内最高の権力者であり、近衛は名門とはいえ、何等の地位になかった。然るに一歩を誤れば民族の破滅にも立至る大事の危機に苖んで、内府が何等機微な耳目を持たず、近衛に教えられてもこれを軽視して寝こんでいたということは、昭和のわが政治家の平素の心構えが察せらるる。

米国では科学的調査とか、調査機関とかについて進歩した国柄だけに、政治家は勿論のこと何事を為すにも大掛りの調査機関を以て所謂天下の心、天下の耳目を把握することが近代戦に行はれます。ギャラップの輿論調査の如きはその一例でしょうか。政治家でもルーズヴェルトのように立派な組織的なブレン・トラストを持って個人の才能の限界を拡大して、その仕事を完遂するように工風していました。<sup>(21)</sup>

このように、近代戦においては、天下の耳目を把握することが重要である。その意味で、昭和の日本においては、政治家の平素の心構えができていなかった。一方、米国では、ルーズベルトの「ブレン・トラスト」は、個人の限界を拡大し

て任務を達成する組織的な知能集団として夙に有名である。

引き続き、

「曾てわが陸海軍の指揮官は幕僚の補佐をうけてその職務が尽せるような組織になっていました。然し幕僚制度というものと茲にいう天下の心、天下の耳目というのとは、意味が違うのでありまして、幕僚の分担に天下の声なき声を聴くように注意した指導者は稀であります。

近年の政治史上で一番権力を振った東條内閣時代の、若しその志があったとすれば、必ず為し得たでありましょうが、遂にその様な着意は全然ありませんでした。政府の耳にはいった民意というものは全く憲兵と警察の情報が主なるものでありました。

私は海軍省調査課長としてかなり民間各界の不平等不満の声を聴くことができ、これを軍務局長（岡）に伝えましたが、彼も星野（書記官長）と等しく警察、憲兵の所謂オーソリタチーフな報告以外余り注意を拂おうとしませんでした。東條失政の最大の原因は實に茲にあったと私は信じておる者であります」。(22)

このように、国民の意志を聞くようにはなっておらず、かつ、その着意もなかった。特に、東條内閣失敗の最大原因は、機械的な報告以外に聞く耳を持っていなかったことにあるとしている。

## おわりに

『六韜新論』の「あとがき」では、太平洋戦争の教訓と現代的意義を六韜に求めている。

「初めの構想は、わたくし自身の兵学思想に六韜を織りこんで見たかったのですが、それには長篇となるばかりでなく、六韜の好きなN君には興味も外れることであろう。これはN君に謹呈するものであるから、構想を改めて六韜を主にして、わたくしの体験からその現代的意義を掴むことにしました。日本は新憲法に戦争放棄を規定したりして、兵学など振向く人もない現在であります。敗戦國の片々たる憲法や列國の國際條約ぐらいで、この人類の歴史が『實

然<sup>モルフォーゼ</sup>變態』を起し得る位ならば、釈迦や基督は決して苦勞されなくて済んだことでしょう。兎に角わたくしは、この第二次大戦、太平洋戦争という幾多の尊い生靈を犠牲にした大災難<sup>カクストロフ</sup>の教訓をわが國民が不用意にも朽ち捨てて顧みないのは實に驚くべき麻痺症状であると思っています。勿論、N君の机辺にこの記録を留めることができるのは、或はそこに不可思議なる天意の存するものがあるのではないかと期待するのです」。(23)

このように、日本に多大な災難をもたらした太平洋戦争の教訓とその現代的意義を六韜に見出すべきとしている。

そして、新たな時代に必要なものとして、

「忘れるということは、賢い處世法には相違ないでしょう。特に太平洋戦争鉄火四年の地獄のような思ひ出は、その苦悩に身魂を削った人々にとっては単に記憶を甦がえらせるということだけでも、無駄な消耗とも思われるでしょう。然し反省を回避し、過去を忘却することは毫も史實の変更ということにはならないし、況して新しい時代の建設にも連続しないのであります。新しい誕生には、矢張り生れ出づる苦痛が伴わなければなりません」。(24)

このように新時代においては、過去を忘却するのではなく、過去の反省と言った痛みが必要であるとしている。

最後に、『六韜漫談』七、雜輯をみれば、六韜における関心事項を伺うことができる。

「六韜の最も味のある又他の兵書經書から特色のあるところ或は詳論してあるところを検討した。今回はその他全篇に互って注目すべき諸點を簡略に涉猟したい。

(イ) 賞罰第十一は、日本の常套語となっている信賞必罰を説く。

夫れ誠は天地に暢び、神明に通ず。而るを況んや人に於いてをや。

(ロ) 兵道第十二

純一不二を説く。心と事行を説く。三味の妙境か。

(ハ) 發啓第十三、文哲第十四、老莊無為の

説を汲む。

天下に志ある者の事を起すの慎密なるべきを評論す。

- (ニ) 文代第十五, 三疑第十七  
宣傳, 謀略戦を説く。
- (ホ) 勵軍第二十三, 礼将, 力将, 止欲ノ将  
太平洋戦争に於ける我が統帥の頽廢
- (ハ) 陰符第二十四, 陰書第二十五  
暗号通信の重要性
- (ト) 軍勢第二十六  
抽象的比喩的であるが, 眞髓に与るるものがある。
- (チ) 兵微第二十九  
勝負の徴は精神先づ見はる。明将之を察す。其の効人に在り。
- (リ) 農器第三十, 兵農一致, 兵法の身常の身  
故に兵を用ふるの具は盡く人事にあり。善く國を為むる者は人事に取る。
- (ヌ) 練士第五十三  
組織, 養成, 琢磨を説く。
- (ル) 文師第一」。<sup>(25)</sup>

このように, 信賞必罰, 統帥, 情報, 人事, 組織等, 『六韜新論』においては, 人間が中心にあることを教訓としている。そして, 高木惣吉が著した『六韜新論』は, 太平洋戦争に至る近代日本の歴史を舞台に展開された, 政治・外交と軍事の関係を実地的に捉え直し, 『六韜』に投射しているのである。したがって, 六賊七害が跋扈する現代において, 愛民, つまり国民を視点に, 広く知見を集めることによって, 初めて歴史の教訓が生かされ, 高木惣吉が結集した理念が現実化する過程を進み始めることができるのである。

E. H. カー (Edward Hallett Carr) によれば, 「優れた歴史家たちは, 意識すると否とに拘らず, 未来というものを深く感じているものです。『なぜ』という問題とは別に, 歴史家はまた『どこへ』という問題を提出するものなのであります」<sup>(26)</sup>と述べている。

つまり, 現在がどのようなときであり, これか

らどこに向かうのかということを見据えるとき, 太平洋戦争後の生成点を振り返ることが重要となるのである。したがって, 現在を定位するため, 拳拳服膺すべきは, 高木惣吉の畢生の大著『六韜』に学ぶべき教訓が余りにも多いことが判明する。なぜならば, そこには戦争が失敗に至る必然が非常に明解な言葉で縷述されているからである。

#### 《注》

- (1) 別名, 「水心兵學」とされている。
- (2) その他, 未発表史料として, 「海南島視察報告」(昭和16年6月4日), 辰巳亥子夫「米國經濟の世界情勢に對する安定比重とその困難性」(1946年6月19日), 「第三次世界大戰の可能性とその様相」(1948年3月31日), 「第三次世界大戰の研究」(1948年11月起), 「戦争に於ける『ロマンチズム』と『リアリズム』」(1948年12月9日), 「原子戦争の可能性」(昭和30年3月), 「米國軍隊の海外駐留に関する研究」(昭和38年9月)等を渉獵した。
- (3) 海上自衛隊幹部学校所蔵「六韜新論」『高木惣吉文庫資料』(1978年5月3日, 茅ヶ崎)(以下, 「高木惣吉文庫資料」という。)
- (4) 同上書。
- (5) 同書。
- (6) 同書。
- (7) 同書。
- (8) 同書。
- (9) 同書。
- (10) 同書。
- (11) 同書。
- (12) 同書。
- (13) 同書。
- (14) 同書。
- (15) 同書。
- (16) 同書。
- (17) 同書。
- (18) 同書。
- (19) 「六韜漫談」『高木惣吉文庫資料』。
- (20) 「六韜新論」『高木惣吉文庫資料』。
- (21) 同上書。
- (22) 同書。
- (23) 同書。
- (24) 同書。
- (25) 「六韜漫談」『高木惣吉文庫資料』。
- (26) Edward Hallett Carr, *What is History?* (London: Macmillan, 1961), p. 102.